

6. 学生からの地域貢献活動実施報告

(1) ユース六篠

代表 神戸大学農学部3年生 長井 拓馬

はじめまして、神戸大学ユース六篠の代表をしております、長井と申します。今日は僕たちのやっていることを簡単にご紹介させていただきます。

“ユース六篠”と聞いても、みなさん何もご存知ないと思いますので、はじめに簡単にご紹介させていただきます。まず、僕たちのサークルは、農業農村フィールド演習という大学の授業をきっかけに3年前から福住に入り、それからずっと活動させていただいています。篠山で活動する神戸大学のサークルは3団体あるのですが、そのうちのひとつで2番目にできたサークルです。

先日、簡単なインタビューを受けたときに、インタビュアーの方に「ユース六篠はピン芸人の集まりだ」と表現されました。良い意味で言えば、それぞれがやりたいことを自由にやっているサークルですが、悪い意味で言えばまとまりがないということになります。

昨年度、活動する中での反省点として、いくつかあがりました。1つ目は、自分たちのやりたいときに活動をしてしまって、地域の人にとってはどうなのだろうということ、また、自分たちの仲の良い、いつも関わっている方のところにばかり行ってしまって、多くの方と関われなかったのではないかとありました。また、駅と活動場所が遠く、交通手段を頼ってしまっていたということがあり、今年はどうしようかな、と考えていたところです。また、本当に地域の役に立っているのだろうか、地域の方にとって僕たちは何なんだろうという悩みです。また、本当に困っている人のところに行くにはどうしたら良いだろうか、という僕の個人的な想いがある、これらをなんとかするためにどうしよう、と去年の終わりに考えていました。

それを踏まえての今年の目標として、まず、僕たちは農学部ですし、授業自体がそれを中心にしたものでしたので、農作業の補助があります。また、いつもお世話になっている神戸大学篠山フィールドステーションの布施さんが猿の専門家ということで、獣害についても話を聞くことが多く、これについても何かできないかということがあります。そして最後は、いつも受け入れてくださっているまちづくり協議会“福住プロジェクト2030”でされている、地域振興活動への参加です。それから、去年の反省を踏まえて、自分たちから継続的に地域の方たちに関わっていくという目標を立てました。

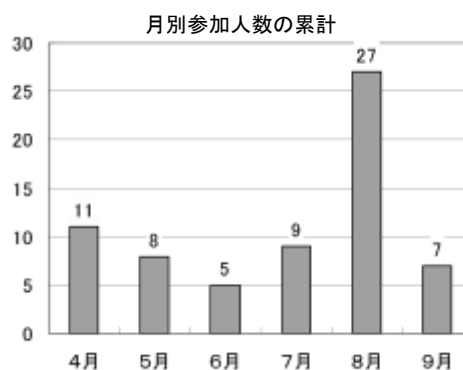
そこで、継続的に活動に行こうということで、活動日を固定にしました。去年までは、行きたいときに行く、声をかけていただいたときに行く、という形をとっていましたが、月に2回は絶対に、“福住に神戸大学のユース六篠が来ているよ”という状況を作ろうとしました。その結果、毎月これくらいの人数が来ています。8月には、福住の大きなイベント“夏祭り”がありましたので、



福住のまち並み



獣害対策の様子



これだけの人数が行ったことになっています。

ここで、僕たちの活動する福住について少しだけ紹介をさせていただきます。篠山市の東の端で、京都府と大阪府との県境に位置しています。そういう立地もあって、昔は宿場町として栄えていました。古い町並みの残る地域で、“伝統的建造物群保存地区”というものに最近指定されたと聞いています。

今日は、特に地域行事への参加についてご紹介させていただきます。主に紹介するのは3つで、春先に実施した“野草クッキング”、夏に実施した“夏祭り”、つい先日は、秋の味覚が今どんどん収穫されている“味まつり”がありましたが、それに合わせた“秋まつり”を紹介させていただきます。時間があれば、いつもお世話になっている“さんばやひぐち”で、どのようなことが行われているのか、ということを紹介させていただきます。

まず、“野草クッキング”です。簡単に言えば、ちびっこたちを呼び集めて、野草を採ってこようというものです。3年前の農業農村フィールド演習の第1回目の授業は、“野草を食べてみよう”という表題がついており、それにあわせて始めたと聞いています。普段は雑草としか思っていないものが大半ですが、実際には食べられるものが多く、それを実際に食べてみよう企画しているのがこのイベントになります。ユース六篠のメンバーはスタッフ兼参加者として3名参加させていただきました。軽く2時間くらい回っただけで、これだけの種類が集まります。写真にもありますが、このような民家のある普通の畦道で採れます。講師の方が、これはどんな草でどこが食べられるかを説明します。

次に“夏祭り”の説明をします。地域の方々がみんな参加されて賑わうお祭りになっています。いつもは、高校や小学校の校庭でしていたものを、今年は伝建地区に指定されることもあって、今回は街道でやろうということでこのようになりました。夜はライトアップされてとても綺麗でした。僕たちは今年で3回目ですが、ネギ焼きやカキ氷を出店させていただいたり、祭りのイベントである“チンドン大会”に仮装をして参加し、素人ながら盛り上げ役をさせていただきました。昨年度はビンゴ大会の司会をして好評でしたので、今回は全体司会をさせていただきました。昨年度は出店させていただくだけでしたが、今回は夜のミーティングにも参加させていただき、企画の段階から関わらせていただきました。全体司会もできてお祭りに少し貢献できたのかな、と思います。去年は冷凍食品を使用しましたが、今年はなんとか地元食材を使いたいとのことで、それを実行して出店しました。僕たちが何も言わなくてもそれを聞いた地元の方が買いに来てくださったり、声をかけてくださったりして、出店して良かったなと思っています。

“秋祭り”は簡単に説明すると、“味まつり”の日程にあわせて、福住の特産品である黒豆や栗を販売しました。今日



野草クッキングで採れた野草



講師による説明の様子（野草クッキング）



街道での夏祭り



夏祭りに仮装で参加

は時間がないのでとぼします。

また普段は、“さんばやひぐち”でちびっこたちの相手をするこ
ともあります。

最後に、地域の役に立つというのはどんなことなのだろう、と考
えたときに、農作業や獣害対策というのはものすごく難しいこと
で、自分たちの自己満足だな、指導者がいないとできないことだ
な、と半年くらい経って感じています。その中で、今日紹介しまし
たイベントへの参加というのは、自分たちで企画段階から関わるこ
とができて、少しは地域に貢献できているのではないかなと思っ
ていて、これからもできれば続けていきたいなと思っています。

今後の展望としては、まだイベントも残っているのでこれから先、
積極的に参加したいということと、農作業の方も見た目以上に大
変な作業が残っているので、できればおじいちゃんおばあちゃん
のところに行くようにしたいなと思っています。以上です。どうも
ありがとうございました。



さんばやひぐち



農作業のお手伝い

(2) はたもり

代表 神戸大学農学部2回生 森田 綾子

こんにちは、神戸大学のはたもり代表の森田と申します。このような場で発表するのは初めてのことでとても緊張していますが、よろしくお願いいたします。

まず、“はたもり”の名前についてですが、私たちは篠山市の畑地区というところで活動しています。その“畑”を“盛り上げる”ということで、“はたもり”となっています。去年、実践農学入門という授業があり、そちらで畑地区に入ることになりました。授業はもうないのですが、今年度も継続して活動していきたいということで、はたもりが結成されました。メンバーは、2～3回生で、農学部、発達科学部、経済学部が中心です。

はじめに、畑地区というのがどんなところかを紹介します。こちらの市民センターから東へ車で10分くらい行ったところにあります。こちらは、クリンソウです。クリンソウという花がとても有名なところで、歴史的な建造物や城跡、お寺など、歴史的な建造物も多いところが特徴になっています。

それでは、はたもりの活動について説明していきたいと思います。去年活動していて、最後の授業の後にいつもお世話になっている農家さんと、この畑地区の課題について話し合いました。

1つ目は、難しい課題なのですが、採算の合わない農業について、それをどうしていくかということです。もうひとつは、畑地区の最大のイベントである“はた祭り”をどう続けていくか。あともうひとつは、先程、歴史的資産が多いと申しましたが、そちらを地域の方によく知ってもらうために、マップづくりをしようということになりました。この3つの柱を中心として、私たちは今年度活動することにしています。

今年度の活動です。クリンソウの鑑賞会や敬老会などいろんなイベントに参加したり、合宿を通じて農作業をしたりマップを作ったりしています。

今日は時間が少ないので、“はた祭り”を中心に説明します。“はた祭り”は畑地区最大の伝統行事です。多紀郡三大祭りのひとつであって、集落ごとにこのように山車や神輿を出しています。去年も祭りに参加させていただいたのですが、集落ごとにみなさんが一緒に活動していて、いろいろな声を聞きました。担ぎ手や乗り子が不足しているのは最大の問題点です。また、祭りへの思いの希薄化で、規模がどんどん縮小しているという問題もあるそうです。実際、お神輿は7台あるのですが、去年は4台、今年は3台と、どんどん規模が縮小しています。存続が危ぶまれているので、畑から出ていってしまった人たちをせめて祭りのときだけでも呼び戻したい、ということで、“どうやったら祭りを盛り上げられるか”というところに重点を置いて活動しています。

私たちは、祭りを盛り上げるために3つの企画を実施しました。



クリンソウ

今年度の活動

5月：クリンソウ観賞会

6月：地域歴史マップ製作、黒大豆定植手伝い

8月：合宿（2泊3日・マップ製作）、デカンショ祭り

9月：合宿（4泊5日・敬老会とはた祭り準備）

10月：はた祭り、黒枝豆収穫手伝い



はた祭り



流鏝馬の顔出しパネル

ひとつはこちらの写真の流鏝馬の顔出しパネルです。この祭りの最大のイベントである最後に流鏝馬が行われます。こちらの絵を描いて顔を出すパネルを作製しました。当日は、小さい子どもから大人の方まで、顔を出して写真を撮ってくださりとても嬉しかったです。

次に、佐佐婆神社オリジナル手ぬぐいというものを作りました。こちらです。去年祭りに参加したときは、スタンプラリーを実施しました。各集落の山車についている提灯の柄がそれぞれ違うのですが、その柄を手作りで消しゴムスタンプにして、この手ぬぐいに押すという形にしました。去年は無料配布にしたのですが、無料配布だとやはり採算が合わず、継続が難しいということで、今年はデザイン性を追及して、1枚300円で販売しました。300枚作ったのですが、190枚売ることができました。最初は販売だけにしようという話でしたが、やはり販売だけでは話題性に欠けるということで、クイズラリーを企画することにしました。パンフレットを作り、はた祭りに関するクイズを5題のせて、祭りを回るとこのクイズの答えが分かるという企画にしましたが、みなさん祭りの方で集落に分かれて活動してしまうので、参加者が少なく、こちらは不発に終わってしまいました。



佐佐婆神社オリジナル手ぬぐい

私たちの活動ですが、去年お世話になった農家さんと一緒に活動しているという形で、なかなか畑地区全体の農家さんに知られていないというのが現状です。ですので、この祭りに参加することで、他の農家さんと一緒に活動できた、はたもりの活動を広く知ってもらえた、ということが非常に良かった点だと思います。今後の活動についてですが、手探りで活動しているので課題がたくさんあります。ひとつは、FacebookやTwitter、みたけの里のホームページなどで情報発信をしているのですが、なかなか地域の方の大半には届いていないということです。また、はたもりのメンバー内でも情報共有ができていないので、どのように情報共有していくか、発信していくか、ということが非常に大きな課題となっています。



手ぬぐい販売の様子

また、これは一番難しい問題なのですが、地域の方のところに入って気を遣われすぎているというのが、私たちが感じている一番大きな悩みです。農作業の手伝いという名前ですが、どちらかというと手伝いができていない、というのを実感しています。農作業をしていて、収穫のお手伝いなどでも、枝豆の収穫の手伝いというより、私たちのお土産作りになっているという感じがします。全く知らない私たちに一から説明して、事故が起こらないように見るのも、お手伝いという名前ではありますが、私たちが負担になってしまっているのではないか、という思いがすごく強いです。お祭りについても、とても楽しく一緒に盛り上げてくれて良かった、と言っただけなのですが、伝統的な祭りなので私たちが入ることで、伝統的なものが何か失われているのではないか、という心配もありますし、農家さんとの付き合い方が課題です。農家さんともっとコミュニケーションをとることが必要ではないか、と思っています。この後のワークショップでみなさんの活動についても聞いていきたいと思っています。

また、歴史マップは3月までに公開ということなので、今年度の3月までに完成させたいと思います。

また、3回生になると実践農学という授業があります。こちらの方で今年の課題を話し合っ、さらなる活動ができたらいいなと思っています。以上です。ご静聴ありがとうございました。

(3) 柏原まちづくりプロジェクト

代表 関西学院大学総合政策学部修士1年 松田 卓也

こんにちは。関西学院大学総合政策学部修士1年の松田が発表させていただきます。今日は、僕たちが柏原で行っているまちづくり活動について発表させていただきます。よろしくお願いします。

はじめに、柏原について簡単にご説明させていただきます。柏原は、この篠山からは電車で25分、大阪からはこうのとりに乗っていただくと、70分くらいで着くところにあります。僕たちがメインで活動させていただいているのは、柏原の中心市街地という地域です。その地域は、先程の地域と同様に、人口は約2000人、高齢化率は約30%と、人口減少や高齢化が進んでいる地域となっています。

僕たちの地域への入り方なのですが、ひとつ理想として考えているのは、僕たち学生が地域に入らせていただき、地域の方たちと一緒に活動し、活性化することを目的としています。最終的には、僕たちが抜けた後も、その活動が地域で続いていけばと考えています。

次に、構成メンバーについてです。学生が地域のまちづくりに関わる方法として、先程もありましたが、サークルや授業、また個人や有志とさまざまです。僕たちの関わり方としては、まず2回生が最初に授業で入らせていただき、その後、2回生のOBや僕を含む有志のメンバーで組織されています。

これまでの過去の活動ですが、このプロジェクト自体は2009年から始まっております。去年までは学部生を中心に、空き家を柏原スタジオ、活動拠点として使わせていただき、カフェやさまざまな活動をさせていただきました。今年からは院生も加わり、地域のイベントに参加したり、柏原に住む外国人の子どもたちと一緒にワークショップなどを行っています。

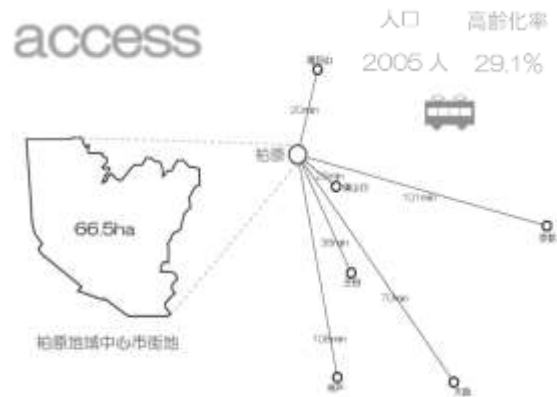
次に、各年の活動を簡単に説明します。2009年は、地元の高校生と一緒にワークショップを行ったり、地域のまちなみを模型で再現しました。また、地域の子どもたちと一緒にカフェを行ったり、地域住民の方々とワークショップなどを行いました。

2010年は、毎年秋に柏原で開催される“織田まつり”に参加させていただき、甲冑をかぶったり、この写真にある柏原スタジオで、去年同様にカフェを行いました。

また、“はじめてのおつかい”という地域の小中学生の子たちと一緒にワークショップを行いました。

去年の2011年は、霧芋を使った料理を自分たちで作ってみようということで、試作品を作りました。また、顔出しパネルを僕たちも同様に作製しました。例年どおりのカフェの中で、この年は、大学にあるサークルの子たちを呼んで“落語カフェ”を行いました。

次に今年の活動を報告します。例年どおりまち歩きを行い、地域の資源や課題探しをしました。“木の根橋”といって木の根っこが橋の一部になっているものもあります。他にも自然がたくさん



柏原のまちなみ模型



霧芋を使ったスープ

あって、自然豊かなところ。また、“太鼓やぐら”や“田ステ女”という俳句で有名な方などの歴史的な資源も多く残っている地域です。

活動の履歴		2009		2010		2011		2012	
	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	
	まちあるき	KG Cafe	まちあるき	織田祭り	まちあるき	織田祭り	まちあるき	スタジオカフェ	
	SWOT分析	古写真WS	KJ法	KG Cafe	ヒアリング調査	Cafe 時	マッピング	スタジオカフェ	
	高校生WS	まちのみ模型再掲	大手倉庫活用法検討	KG Cafe	MAP作りWS	落語カフェ	KJ法	異文化交流WS	
		柏原FW報告会	観光資源調査	はじめての おつがいWS	法学部参加	報告会	スタジオカフェ	ACF	
			KG Cafe 準備				大学院生参加		
成果物	地域分析表	まちのみ模型	地域分析表	大手倉庫模型	地域分析表	資料整理	地域分析表	パンフレット	
	古写真を用いた分析の調査結果		観光資源MAP	活動報告書	ポスター	MAP	MAP	まちのみ模型	
	MAP	活動報告書		地域活性化提案書	Tシャツ	MAP	ポストカード		
					顔出しパネル	活動報告書			

次に、探してきた資源や課題などを地図にマッピングし、データ化していく作業を行いました。赤色の地域が歴史的なところ、黄色のところは文化的な資源があるなど、地図にまとめてデータ化しました。

次に、KJ法を行いました。ポストイットを2種類用意し、緑色を地域の資源、青色には地域の課題を書き、それをグルーピングすることにより地域を分析しました。ここから分かった地域の課題や資源を少し説明します。柏原の中心市街地はすごくコンパクトにまとまっていて行動しやすく、いろんなものが集積している地域です。また、僕も何度か経験があるがあるのですが、まちを歩いていると、小学生や高校生の子どもたちが挨拶をしてくれるような、すごく人が温かい地域です。先程も言ったように、織田家の歴史や俳句の歴史などが残っているところが僕たちの資源と捉



KJ法によるまちの分析

えたところ。また課題は、高齢化の進行と、柏原周辺にあるロードサイド型の大型ショッピングセンターによって、中心市街地内のお店に少し元気がないなというところ。また、交通の便という点で、特急を乗れば70分ですが、快速だとたまたま2時間くらいかかるので、なかなか外から来ていただくのが厳しいかなということが課題として挙げられました。

このスタジオカフェですが、今年は、先程の分析結果をもとに地図を作成し、当日来ていただいた地域の方々にお話を伺いました。その地図の成果物として、このようなパンフレットを作成しました。そのときの活動を丹波新聞さんに少し取り上げていただきました。



柏原まちあるきマップの例

今年はカフェを今までに2回実施していますが、2回目は“今と昔をつなぐ”というテーマを決めて行いました。具体的には、地域の方々のお話を伺ったり、昔の写真をいただいたりしました。

また、近くの写真館に行って昔の写真を集め、それを今の写真と比べました。当日はポストカードを作成し、カフェに来ていただいた方に配布しました。また、現代の柏原の模型を作製し、昔の柏原はどうだったか、当日カフェに来ていただいたお客さんにヒアリングし、それをアンケートにまとめています。今は、集めた資料を基に、昔の柏原を再現す

るようなイベントが何かできないか企画を考えています。

今までの活動は、どちらかというスタジオで僕たちが主体となっていた活動であり、なかなか地域の方に来ていただけなかったりしていましたが、それを解決するために、僕たち自身も地域のイベントに積極的に関わっていくべきかなと思い、いろいろな活動に参加しました。

その1つ目が、“アートクラフトフェスティバル”というものです。柏原の丹波年輪の里で行われる今年で21回目のイベントで、陶芸やガラスなどの芸術家さんがテナントを出して、自分の作品を展示したり販売したりする企画に、僕たちも運営で手伝わせていただきました。

もうひとつが、“日本語教室ワークショップ”というものです。これは、柏原に“日本語教室こんにちは”というボランティア活動があり、その代表の時里（ときさと）さんが、柏原にいる外国人の小学生たちに、放課後、宿題や予習復習を教えられていました。僕たちも少しお手伝いできませんか、ということで活動に参加させていただいています。勉強を教えたあとは、お菓子を食ったり川で遊んだり、かけっこをしたりしています。

今後の活動として僕たちに何ができるか考えたときに、先程のアートクラフトのイベントと小学生の活動が繋がっていなかったのです。僕たちが地域でできる活動を考えてときに、タテ割りになっているところに僕たちが仲介役として入っていくことです。

今考えているのは、外国人の子どもたちや芸術家さんたちと一緒に、陶芸教室などのイベント企画を考えているところです。今後どうなるか分かりませんが、このような活動を続けていき、少しでも地域の活性化になれば良いなと思っています。以上です。ご清聴ありがとうございました。



アートクラフトフェスティバルでの打合せの様子



日本語教室ワークショップ

(4) 丹波学生企画部

代表 関西大学環境都市工学部建築学科4回生 植地 惇

はじめまして、関西大学丹波企画部4回生の植地と申します。それでは説明させていただきます。よろしくお願いいたします。

まず、学生が関わり続けるということについて、丹波と関大の関係は7年前から始まりました。丹波と関大が7年間付き合ってきた中で、いろいろなプロジェクトができるようになって、そういった流れの中で、僕たち“丹波企画部”というものができました。

丹波企画部の1年間の活動の中で、1年間を通してワークショップを行っていきまして、ポスターの作成や企画運営などがあります。その中で、“遊び”というのをひとつのコンセプトとしています。僕たちが丹波で活動し、遊びながら僕たちでしか見つけられない丹波の魅力を探し、それをまた、まちの人に発信できたらいいなと思ってワークショップをさせていただいています。そのワークショップの後に、今日の収穫として毎回まとめています。右図のようにまとめたものは“丹波の歩き方”として、遊び方や僕たちが食べたもので美味しかったものをまとめ、“丹波歩き方ブック”のようなガイドブックを作れたらいいなと思っています。

丹波企画部以外でも丹波市氷上町で活動している“ATACOM”というグループは、愛宕祭りにも参加していきまして、番外編で載せたいと思っています。作成したものは、11月3日に青垣町佐治で開催される“八宿祭り”という祭りで展示する予定ですので、また良かったら見に来てください。

今回発表させていただくのは、“沢野遊園地改修プロジェクト”です。沢野の自治会から、佐治スタジオの方に“公園を改修してほしい”と依頼がありまして、せっかくなので僕たち学生も参加させてもらおうというものです。

沢野遊園地の位置ですが、丹波の北の方にあり、僕たちの活動する佐治スタジオとの位置関係は右図のようになっています。

沢野遊園地の現状としては、水はけが悪く、長細い、建物に囲まれている公園です。沢野遊園地改修プロジェクトの主な目的としては、利用頻度が低くなっているグラウンドとしての整備、また、管理がされておらずコケが生えていたりするので、持続的な運営管理をするための仕組みをどのように作っていくか、さらに、沢野遊園地自体がその集落においてどのように位置づけられるか、ということを考えて僕たちは計画しています。

また、このプロジェクトに対して、3つのコンセプトを設けています。“みんなで作り続けていく公園”“建物に囲まれた落ち着きのある空間”“公園にある資源を最大限に活用する”という3つのコンセプトです。



ポスターの作成



丹波歩き方ブック



沢野遊園地と佐治スタジオの位置関係

沢野遊園地改修プロジェクトに対する3つの軸

1. みんなで公園を作り続けている公園←運動体
2. 建物に囲まれた落ち着きのある空間
3. 公園にある資源を最大限に活用する

このお話をいただいたのは昨年ですが、昨年から順を追って活動の内容を報告させていただきます。
 まず、私たちは大学で、佐治スタジオの出町さんといろいろ検討していきました。実際に、ヒアリングワークショップをまちの人に行い、沢野遊園地がまわりの集落にとってどのように捉えられていて、どのような使い方をされているのかを調べました。

ワークショップの2回目として、ランドスケープデザイナーの井上さんという方に来ていただき、水はけがどれくらい悪いのかを実際に穴を掘って体験したり、沢野遊園地がどのようなものなのかという講習を受けたり、模型を使いながら沢野遊園地がどのようなものなのかを教えてくださいました。

このラフなスケッチは、ワークショップのあと学校に戻り、いったいどうい公園にしたらいいかをスタディしたものです。右下などから分かるように、公園というものを公園内だけで考えるのではなく、まちの中での公園のあり方、集落にとってどういう公園であつたらいいかを検討しました。

実際に沢野自治会の方々にプレゼンをして、僕たちの考える3つのコンセプトについて了解していただきました。

その3つのコンセプトについて説明していきます。

まず1つ目の“みんなで作り続けていく公園”というのは、僕たちが一番重きを置いているところです。公園が常に動き続けている状態、いろんなワークショップをしている人が入ってきたり出て行ったりするという考え方です。例えば、僕たち学生も年を追っていくと、僕たちはいなくなりまた新しい人が来ます。出て行った卒業生にとっては、きっとこの沢野遊園地は特別なものになると思いますし、新しい人が入ってくることによってまた違った見方や違った価値観が入るのではないかと思います。右図は、その考え方を模式的に図で表したものです。従来の公園作りというのは、公園を作り始めて終わればみんなが離れていき、管理する人が何人かいる、という状況になると思います。僕たちの考える公園づくりというのは、持続的に僕たちが入ったり、ワークショップなどの活動をしたりすることによって、どんどん次に人に伝わって行って、僕たちがいなくなっても勝手に活動が起こるのではないか、公園に絶え間なく動き続けるようなものができるならいいなと思っています。それが“運動体”なのではないかと考えています。

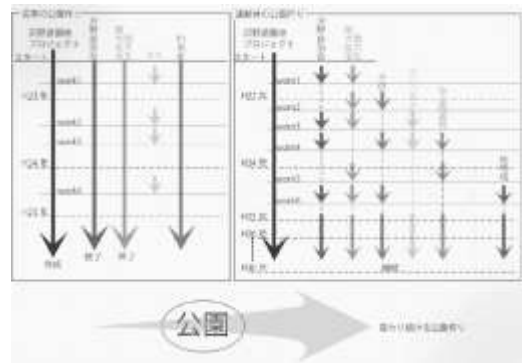
2つ目は、“建物に囲まれた落ち着いたある空間”です。この特徴としては、原っぱ型の多い丹波には珍しい囲まれ型の公園で、これが沢野遊園地の魅力ではないかと思っています。今ある公園のフェンスやガードレールと取ったりすることによって、家に囲まれた場所が公園である、という見方ができると思います。例えばパリの広場のように、沢野遊園地にはこのような可能性があるのではないかと考えています。



ランドスケープデザイナー井上氏によるWS



スタディスケッチ



運動体の公園作り 模式図



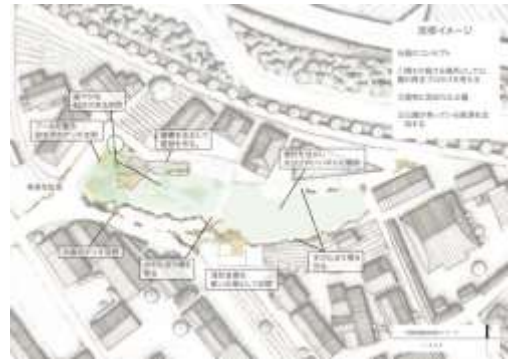
建物に囲まれた落ち着いたある空間

3つ目は、“沢野にある資源をうまく活かす”です。最初に述べましたように、沢野遊園地は水はけが悪くなっていますが、勾配をつけることで水が流れ、乾いているところと水の溜まる場所を作ることを提案させていただきました。他にも、遊具などが使われていない現状があります。右図が全体の改修イメージで、ウッドデッキを設置したり倉庫を集いの場としたりします。

今年の活動を説明します。まず、プロジェクトの細分化として、各プロジェクトに一人プロジェクトリーダーをつけ、それも常に動き続けている状態を作ることによってワークショップが絶え間なくできるのではないかと考えました。実際にこのように実測をしたり、色を塗ったりフェンスを壊すときも、どれくらい壊すのか調査をしています。右の写真は、この前実施した掲示板のワークショップです。このときは、氷上西高校の生徒さんも来てくれて、“みんなでやっている”という風景を、沢野に起こせたのではないかと思います。

今考えているワークショップは、ガードレールに色を塗るといったものです。加工したイメージ図を元に、どんどんイメージを膨らませて、どのようにワークショップを行うのかを考えています。

このようにワークショップなどをいろいろ行っていくことで、沢野遊園地が“動き続ける運動体”になっていくのではないかと考えています。以上で発表を終わります。ご静聴ありがとうございました。



沢野遊園地 改修イメージ



掲示板ワークショップ

7. 民間における活動支援の報告

Mランド丹波ささ山 専務取締役 井階 正義

皆様こんにちは。先程ご紹介いただきました、Mランド丹波ささ山校の井階と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

“支援企業”という形でご紹介をいただいたのですが、決して大したことはしておりません。当初、神戸大学のみなさんが篠山に入られて、農業をされているということは、自動車学校ですので情報は入っておりました。たまたま、神戸大学の松原先生という方がいらっしゃり、駅から自動車学校まで学生のみなさんを送迎してもらえないかというご依頼を受けました。そのようなことでしたら、今作業されているところまで一緒に送っていきませんか、ということでお話させていただきました。今日も布施さんがいらっしゃいますが、布施さんも熱い思いで訴えてきてくださいましたので、じゃあ応援しようということになりました。

我が社は現在、合宿免許を始めてから、篠山は非常に少子化が進んでおりますので、少しでも若い方に来ていただければなということで5年ほどになります。若い方が来られるということは、まちが明るくなりますし、また、いろんな風も吹いてきます。何よりも、楽しい雰囲気が出てきます。

今回、神戸大学の学生さんが来られるということで、いろんな部分でまちが明るくなる、楽しくなるのではないかと思います。支援をさせていただきました。ただ、支援といいましても、非常に恥ずかしい面もありまして、言われた時間に向かえに行くのを忘れていたり、迎えに行く場所ではなくて逆に送る場所にバスが行っておったり、いろいろな失敗もしながらやらせていただいております。

みなさんにはよく“感謝しています”とおっしゃっていただきますが、決して私どもはそんなことは思っておらず、逆に“篠山に来ていただいてありがとうございます”という気持ちでおります。

我が社のオーナーは、“君はなんのために生きているんだ、それは社会に奉仕するため、社会に貢献するため、しいては、みなさんに喜んでもらうためだよ”という話をよくします。我が社にとって神戸大学のみなさんは、篠山に来て喜んでいただく、そういった学生さんではないかと思っております。今日いろんなお話を聞かせていただきまして、みなさんがこの丹波地域を盛り上げようという思いをひしひしと感じております。できるだけ我が社としても支援をしていきたいですし、もっともっと丹波地域が明るい、そして楽しいまちになっていくことを願っております。

今日このような場にお招きいただき、お話をさせていただくのはいささか抵抗があったのですが、お招きいただきましたことに御礼を申し上げます。みなさんとともに、もっともっと役に立てるような形で取り組んでいきたいと思っておりますので、また応援をしていただければと思います。本日はありがとうございました。



Mランドニュース

8. フリーディスカッション・ワークショップ

コーディネーター 神戸大学大学院農学研究科 准教授 中塚 雅也

中塚（コーディネーター）

皆様こんにちは。コーディネーターをさせていただきます、神戸大学の中塚と申します。よろしくお願いいたします。

ワークショップを1時間ですというは少し無茶ですが、1時間しかないということで、みなさんご協力をお願いします。

このようなことをするのは今回が初めてですが、Facebook でこのようなページ（参考：<http://facebook.com/RuralStudentsNet>）を立ち上げています。このページでワークショップの結果を残しながら、今後の連携や、これからこの丹波地域で活動する中で何か新しく一緒に何かしようなど、情報共有をこの場でできればと思います。その第一歩が今日になればいいなと思い準備させていただいています。



今日のスケジュールを説明します。まず、グループ内で自己紹介や交流・意見交換していただきます。その後、全体での情報共有をします。

この Facebook ページは、先程1時間前に焦りながら作ったのですが、今日のフォーラムはこの Facebook と連携させながら進めようと思っていて、このワークショップでの情報共有と今後の相互の交流連携のために使っていただければと思います。手に端末がある人は、「いいね！」を押しておいてください。途中で何か気になった人は、随時ページに書き込んでいただければ、後で布施さんがなんとかするとおっしゃっていますので、気にせずどんどん挙げていってもらえたらと思います。

ワークショップの内容ですが、1つ目は“自分たちの活動の内容と問題を共有していきましょう”ということです。2つ目は、“今後、一緒にこんなことやっていったら面白いのではないか？”ということの2つです。

では早速ワークショップを進めていただきたいのですが、班内で自己紹介をする時間はないので、全体でしたいと思います。1回生の人、手を挙げてください。2回生、3回生、4回生、修士、大学の先生、研究員の方、地元の方、行政の方、それから大阪出身、兵庫出身、京都出身、丹波地域、近畿圏外、関東出身、みなさん挙手ありがとうございます。ということで、自分の席にいる人たちがこんな人というのを覚えていてください。よろしくお願いいたします。

先生方グループは何を話したらいいのだろうと思っていらっしゃるかもしれませんが、“学生たちの支援をどうしていったらいいか”や、先生同士もこの場で初めての方もいらっしゃると思うので、お互い自己紹介したり、“教員としてこのようなことに取り組んだ”といったお話もあると思います。地元の方同士は初めての方もいらっしゃると思いますので、お互い意見交換していただきたいなと思います。最後に、先生方も地元の方も一言発表をお願いしたいと思いますのでよろしくお願いいたします。それでは始めてください。

（ワークショップの様子）



中塚（コーディネーター）

それでは1班から発表をお願いします。時間がないので、前の班が言ったことは言わないという方法で各班1分をお願いします。

中島（1班）

関西学院大学法学部3回生の中島です。簡単にお話させていただきますが、やっぱりどこの団体も悩んでいることは一緒だなと思いました。活動の目的や継続性、それをしてどうなるのかということこれから重視していかないといけないなということです。また、そういった悩みをみんな持っていることを今日初めて知ったと思うので、各団体がお互いに連絡を取り合って、課題を共有してお互いに改善策を挙げていければいいのかなと、今回のワークショップを体験して思いました。以上です。



出戸（2班）

関西学院大学総合政策学部都市政策学科の出戸と言います。2班では共通する問題が3つ挙げられました。1つ目が継続性です。大学生というのは、長くても4年間しかいられないので、代表者やメンバーが変わることによってニーズが変わってしまうということです。

2つ目が情報交換です。同じ団体内、丹波や篠山で活動している団体同士の情報交換、あるいは学生と地域住民との情報交換ができていないなということが挙げられました。3つ目が、地域と学生との関わり方です。学生の思うニーズと住民の思うニーズが違うので、それをどうすり合わせていくかが難しいなという話になりました。改善策についてはまだ考えられていません。



関谷（3班）

関西大学建築学科4回生の関谷大志朗と申します。3班では主に2つの話をしました。ひとつはモチベーションの話、もうひとつは仕組作りの話です。関わっていく人の人材不足の話が出ました。今日ここにはたくさんの大学の方が来ていると思うのですが、その中でも一部の意識の高い、モチベーションの高い人たちだと思います。授業で丹波に関わっている人たちもいると思いますが、やっぱりモチベーションの低い人たちは離れていってしまう。そういった人たちに対して、どう意識を高めるのか、どう意識を高めていく場を作るのか、という話になり、宣伝方法などが問題点として挙げられました。



また、仕組作りという話が出ました。学生が関わっていくサイクルがあると思うのですが、それをどう作っていくのが大事なのではないか、その仕組みを作ったときにどういうゴールがあるのか、という話にもなりました。関大だと、“関わり続けること”というのが大事だと言っていますが、関学さんだと、“学生が関わらなくてもまちが主体となって自分たちがやっていくような最終的なゴール”を目指しているそうで、その仕組みを作っても最終的なゴールというのはいろいろな形があるのではないかなという話になりました。以上です。

喜多 (4 班)

神戸大学 3 回生の喜多と申します。4 班では、みんなの共通する問題意識というのを考えました。そこで出てきたのは、地方に人口減少や高齢化という問題がある中で、地方に人を呼び込むということを考えたのですが、まず問題に挙げたのは、学生と住民の交流が不足しているのではないかとことです。神戸大学やその他の関西の大学では、授業の一環として地域に入って学習するというプログラムが組まれているところが多いのですが、関東の大学ではなかなか進められていないという声もありました。そこで、“きっかけ”が大事だという話になり、授業という形でも学生が関わる機会を増やしていくことが必要なのではないかと考えました。



また、“情報発信”も大事だという話になりました。マップづくりやカフェを開いているという発表がありました。そういったように情報発信をしていくことで、地方に人を呼び込めるのではないかと思います。以上で発表を終わります。

曾束 (5 班)

神戸大学 3 回生の曾束と申します。私たち 5 班では、もう意見が結構出てきたので、主にお伝えしたいことは 2 つです。1 つ目が、“継続性”という問題に関わるのですが、資金面で交通費や宿泊費などの問題が挙げられました。もうひとつが、“学生活動を今やっていて、学生活動が終わったあとにどうなるのか”、“この地域に住みたいのか”、“その地域とどういう風に関わっていくのか”、そういうことも私たちが話し合っていたらいいなということになりました。いろいろな大学の方がおられたのですが、すごく楽しくワークショップができたので、これからも活動を密にしていければいいなという話になりました。



鈴木 (6 班)

神戸大学 2 回生の鈴木太郎です。6 班では、今まで話された内容と少し違う話がいくつか出たので、いくつか紹介したいと思います。まず 1 つ目です。学生が 4 年や 6 年のサイクルで出ていってしまうということに関してですが、今まではネガティブな側面が出ていましたが、定期的に学生が入ってくることによって、地元の人が面白さや魅力を再発見できたり、学生が関わることでいい状態になっていくのではないかな、ということです。



もうひとつは、関大の方からでたのですが、遊園地のプロジェクトをしていて、“自分たちのやりたいことを実現したい”という想いと、“地域の求めていること”がズレてきたりするので、その辺りが大変だなという話になりました。

あともうひとつは、“アプローチの仕方”という話がありました。“地域活性化”ということから入っていくと、どうしても、どうやって地域に入っていくかという取っかかりがを見つけ辛いという話になりました。関大なら建築系から、神戸大学なら農業系から、東海大学や関学は観光に近い側面から入っています。取っかかりは違うけれど、最終的には同じような問題になってくるね、という話になりました。以上です。

松川（7班）

こんにちは、神戸大学農学部3回生の松川と申します。みなさんと同じように継続性についての話と、団体としての成果とはなんだろうかという話が挙がりました。まず、継続性についてですが、人と人とのつながり、例えば外に広がっている人が入っていく、人を呼ぶにはどうしたらいいだろうかということと、団体内の学年別のグループができてしまうので、そのグループやプロジェクトごとに繋がるにはどうしたらいいかということです。学年別、グループ別のつながりについては、共通に集まれる場所ができればいいのではないかという話になりました。ボックスや部室のような場所があれば、そこに常に誰かがいて、誰かがいるからそこに行って、そこでいろんな話や会議ができたりするので、部室のような場所が必要だと思いました。

もうひとつは、成果についてです。私たちは祭りで店を出したりしていますが、イベントで地域の方と協働でものをつくったという活動を聞き、そんな風に、自分たち単体で活動するのではなくて、地域の人と協働で何かひとつのものを作ったり、企画をするということは大きな成果になるのではないかという話になりました。以上です。



長井（8班）

神戸大学の長井です。継続性については8班でも議論しまして、きっかけは遊びの方がいいのではないかという話になりました。それをきっかけにして、地域に愛着を持ってもらって、それで入ってくる人を増やすというのは、一番続いているところのスタイルでした。

もうひとつは、互いに切り口が違うということです。互いに思っている切り口を武器にして地域に入っていますが、それをコラボして何かできるのではないか、それを話あう場所がほしいなという意見がでました。以上です。



小田（9班）

神戸大学発達科学部3回生の小田です。9班では、結論というより、話がお互いの問題の裏側にいってしまいました。どこの地域も学生が入るということはつまり後継者不足が生まれているということで、それにどうやって取り組んでいったらいいのだろうという話になっていってしまったので、あまりまとまりのある結論を得ることはできませんでした。今日はこれだけ学生さんがいらっしゃいますし、IT化で便利になっているので、活発な議論の続きはFacebook上でもできるのではないかと個人的に思っています。ありがとうございました。



山下（10班）

関西学院大学の山下です。これまでの学生の話と違って、学生を監督する立場や学生を受け入れる立場からの議論ということになります。時間がなかったので、学生たちとどう付き合うか、どう支援するかという話になりました。大きく3つ話題がありました。1つ目は、立地場所等で、“学生に来てもらいたいけど来てもらえない”という地域もあるがどうしたら



いいか、あるいは、“学生に来てもらっているのだけれど、継続的に来てもらうためには、交通手段の確保やバスの確保をどうしたらいいんだろう”ということです。

2つ目は、“学生の活動が本当に地域のためになっているのだろうか”“本当に地域貢献になっているのだろうか”というところ。それと関連をして、“単発型やゼミ単位の活動では限界があるのではないか”“大学としてマネジメントをしっかりやっていく必要があるのではないか”、あるいは“滞在型や合宿型の活動が必要ではないか”ということです。もちろんお金の面もありますが、自治体側の受け皿の支援も必要であろうと思います。

3つ目は、受け入れる地域の課題として、もちろん来てくれるだけで嬉しいというのにはありますが、やはりそれだけでは続きません。地元への負担も大きいです。その中で、地元が“学生をもっと利用してやろう”という発想を持つことも必要ではないか、あるいは、地域と学生が信頼関係を築くためには、“こうしていきたいというイメージをお互いに共有する必要があるのではないか”という話がありました。

他にも、“篠山で学生がそんなことをしているのを知らなかった”という声もまだまだありましたので、情報発信はやはり大きな課題なんだと思います。いずれにしても、学生を受け入れる地域の方々の意識、みなさんは学生の活動をどう見られているのだろうか、というところは気になることです。以上です。

藤川 (11 班)

一橋大学大学院修士 1 年、山形県朝日町役場関連として東京の方から出て参りました、藤川と申します。よろしくお願ひします。まず一番重点としておきたいことは、行政の目線、住民の目線、学生の目線、そして先生方の目線、各立場における求めていることと、動きたいと思っている欲求やモチベーションにズレが生じていて、歯車がかみあっていないんじゃないかということです。山形県朝日町では、こういう改善方法で動かしやすいという紹介をさせていただきながら、各立場の方々に話し合ったことのメッセージをお伝えさせていただきます。



まず、山形県朝日町は、“エコミュージアム”というものを 20 年前から先進事例として導入させていただきました。どういうものかという、まち全体がミュージアムです。そこに住む住人のひとりひとりが学芸員です。みなさんが民財資源という地域資源です。そのみなさんが“まちをどんどん活性化させていきましょう”というものをキャッチコピーとして 20 年前に掲げながら、今まだ浸透させきれていないというのが現状です。僕はそこに問題意識を持って、どうやったらこのまちの取り組みが日本全国に伝わるのか、まちの求めているニーズを、そこに行きたいと思う人たちに對してどうやって結びつけられるのかと考え、自ら売り込んで役場に行き、研究フィールドを提供させていただきました。ゼミとか学問とか関係なく売り込みに行ったというのが、今、朝日町に受けていただいている要因です。今日ここに来てのも、朝日町に全部予算を出していただいています。そういう立場で、“学生だって自ら切り開けるんだ”ということをメッセージにして、みなさんに対して少しお伝えさせていただきます。

まず、住民のみなさん。学生を受け入れたいと思うのであれば、美味しいものを食べさせてください、楽しい話を聞かせてください、どんどんまちの自慢話を聞かせてください。そして何より、私たちと遊んでください。まちを好きになるということは楽しくやっていくことで、学生はそれを求めています。みなさんの温かい笑顔で受け入れていただくことが一番のプレゼントです。

行政のみなさん。まちのルールをつくる、規則をつくる立場にあると思います。まず、学生を利用する前に少し考えてみてください。学生が今、どういう不安を抱えているのか。年金や就職、研究よりも自分の人生が心配だという学生がたくさんいます。その学生をどうやって社会に出すためのサポートをするのか、そういうところに耳を傾けてください。サポートをしてあげるというのも学生の心を動かす立派なインセンティブです。サポートをした上で学生を受け入

れる体制を整えていただきたいなと思います。朝日町にはそれをしてくれという訴えかけをして、少しずつ役場を動かす働きをしています。

先生方のみなさん。ゼミ単位で学生にまちに行け、と言うと学生はどうしても義務感を感じてしまいます。単位を取らないといけない、まちに対して還元しないといけない、先生を立てないといけない、学生なりにすごく悩みます。ゼミ単位という考え方はやめてください。まちづくりは総合分野です。建築も農学も音楽も何も関係ない。まちづくりが楽しいという学生をとにかく遊ばせてあげる。学生の目線で繋いでいくという取り組みが非常に大事だと思います。

そして学生のみなさんへ。こうやって自分で動くことで切り開いていくことができるんです。予算に関しても、時間に関しても、研究がしたいという欲求があったら、いくらでも大人のサポートがいただけることを確信できました。お金がないのならないなりに、大人に出してくれという環境をいくらでも改革できるんです。これだけの還元をするからお金を出してくれと訴えかけをすれば、社会は動いてくれるということを知ってほしいと思います。

最後に、先程 Facebook や Skype という話が出ましたが、それはあくまで保管作業です。とにかく頼らない。気になる人がいれば連絡先を聞いて、必要があれば会いに行く。これが一番大事だということを、今のネット社会の人たちは忘れていたような気がします。僕は知ったつもりで Facebook を好きになれず使っていない人間なのですが、そういったことも真剣に考えていただきたいなと思います。少し長くなりましたが以上です。

木田 (12 班)

私は淡路島からやってきました主婦です。みなさんと同じくらいの子どもがいます。これからの社会の中で、子どもたちはどうやって生きていくのか、こんな社会や教育でいいのか、ということを知りたくて、NPO を立ち上げました。今日ここにいる学生のみなさんは、学生の立場が社会の中でどんな立場か、どう考えているのだろうと思いました。これからの社会は厳しいですが、こんな社会の価値観を変えていかなければなりません。これを変えていく、これからの社会を作っていくのはみなさんです。



今日のみなさんの発表を聞いて、私たちの班でも話に挙げたのですが、地域としては学生が来てくれることをとっても喜んでくれるというお話でした。きっかけは一人でもいい、または大学と連携して、という話がありましたが、きっかけとなるキーマンが必要だということです。そのキーマンというのは、決して大学ではなく、先生であったりそこに来る学生であったり、その個人ひとりの思いから始まるんだなという気がします。私は地域づくりをしていますが、一人でも地域は変わると私自身も思っています。一人が二人になり三人になり、最後には大学も動かす、地域も動かす。そうした力に発展していくまず第一歩の一人が、きっかけとして地域に必要なのではないのかなと思います。

先程発表のありました福住では、大学生が来て青年団ができたそうです。感動しました。若い人たちに触発されて、今までになかった青年団が復活したそうです。そうした力を若いみなさんは持っています。

また、この篠山市は私の憧れのまちなのですが、学生を受け入れるための地域連携センターの研究員の給料を、国の研究費で払っていたものをその後、市が出しているという話を聞いて、篠山市は本気だなと思いました。

そして学生の提案をどう受け入れるか。この地域では、2年前からインターンシップを始めて、インターンで来た学生が提案したことを企業がちゃんと聞いて、それを実践しようとしている。それも素晴らしいなと思いました。それがビジネスに繋がっていくと考えている商工会の方もおられました。学生が企業に取材し、なぜ新商品が売れないのかなどを新聞に発表するというのもやっているそうです。インターンに入るだけでなく、それをいかにビジネス化していくのかということを考えるほど、学生との繋がりがあつたんだなと思いました。

先程 Facebook の話がありました。発信してもほとんど知られていないという話です。発信するのはいくらでもできるけど、いろんな形で受け取る側の立場、本当にそれが受け止められているのかを確かめるべきだと思います。IT に

よってまちづくりをしていくという方もおられました。農村地域というのは高齢者の方が多いので、どう伝えていくのかは大事なことで、口コミほどすごいものはないなと思っています。人と人とは向き合って話し合っていくのはすごく大事なことだと思います。そうした情報をどうやって広げていくのか、発信する側と受け取る側の絆がちゃんとできているのか、という見直しが必要じゃないかと思っています。

最後に、“継続”というお話がありましたが、“これからの社会はどうあるべきなのか”“この地域はどうあるべきなのか”ということの議論を果たして地域と学生ができているのだろうかという気がしました。そうした大きなビジョンを持つことで、学生が変わっても“このテーマでこのまちはずっとやっていくんだ”というテーマさえあれば、そこに“継続”は生まれてくるんじゃないかなと思いました。自分たちのやろうとしていることと、まちの大きなテーマとを合わせて考えていくべきではないのかなということ、私自身の想いとして感じたので発表させていただきました。以上です。

中塚（コーディネーター）

ありがとうございました。

お話にもありましたように、Facebook は当然、単なるツールでしかありませんが、今回は学生が多いから、と思いきやこういうことをしてみました。今日のワークショップの時間は短かったと思いますが、継続的に情報共有などをしながらこのページも使ってもらえればいいなと思います。また、この場だけでなく、今日出会った関係で違う場を作っていたり、情報共有等をしていただければいいなと思っています。



最後にもうひとつ、これもお話にありましたが、“地域の問題”というのは、ひとつの学問分野に限定されたものではないと思います。たぶん、多くの農学部学生たちは建築のきれいな絵を見たらすごいな、と思ったと思います。また、地域の方でも建築のこんな技術を持った人が一緒にやりたいな、と思ったかもしれないし、農学部の人がお手伝いに来てくれたらいいのにな、ということもあると思います。

今回は関東やさまざまなところから来ていただいていますし、継続的じゃなくても一回きりでも良い、“合宿でこんなことをやりたい”などの話もあると思うので、この機会をいい機会としてもらって、双方の地域に入ったり出たり、また、人がいないときに助け合ったり、情報共有したりしていただければいいな、と思います。

もし時間があれば、この後一緒にご飯を食べながらでも、議論の続きをしていただければと思います。それでは 2 時間お疲れさまでした。本日はどうもありがとうございました。

